

タイトル	学園を去るにあたり(退職記念)
著者	栗原, 豪彦
引用	北海学園大学人文論集, 45: 15-21
発行日	2010-03-31



栗原 豪彦教授

学園を去るにあたり

栗 原 豪 彦

北海学園大学での7年間は、立地のよいキャンパスと広々とした研究室など恵まれた環境で仕事ができただけで、実り多いものでした。同僚の諸先生からは大いに知的刺激をいただきましたし、事務局の方々にもなにかと支えていただき、心から感謝しています。おおむね素直で明朗な学生や大学院生とともに教育・研究に従事できたのは幸いでした。当然ながら近頃は年齢を感じるが多くなりましたが、ともかく大過なく定年を迎えられたことでひと安心しています。大学教師にとって「大過なく」というのは何の自慢にもなりません、学内関係者にあまり迷惑をかけずにすんだのは何よりというのが率直な感想です。

教育に関しては、基本的な専門知識を身につけさせるという本来の目標のもと、一部、二部とも私なりにできるだけ丁寧な授業を心がけましたが、内容や難易度に関しては不満をもった学生もいたようです。本学の特色である2部のクラスは、学力差も年齢差も想像以上でしたが、かなり優秀で意欲ある学生も混じった多様な学生たちを相手に当初は戸惑いもありましたが、今となっては貴重な体験です。またゼミ生たちとの交流を通して今という時代の若者の思考様式や価値観を垣間見ることができ、日本の大学教育のあり方をあれこれ考える機会をもてたことも有益でした。

研究については、恵まれた環境で好きなテーマを自由に勉強できたことは幸いなことでした。いわゆる公務雑用も敬老精神から押さえていただきましたが、そのわりに研究成果をあげられなかったのは忸怩たる思いです。生来の怠け癖がたたり、やり残した仕事やら読みそびれた本が多く残ってしまいましたが、今後も少しずつ学び続けたいと思います。最後に、自戒をこめて、後の世代の研究者を念頭においた勝手な感想をひとこと。

年のせいで、近頃は日本における欧米の言語学の受容の歴史や日本で英語学や言語学をやることの意味などに思いを馳せることが多くなりました。日本の英語学や理論言語学は、あちらの「流行り」の理論を追いかけたり、欧米の研究を日本に紹介しているだけといった昔からの批判は、大勢としては残念ながら今も当たらずと言えど遠からずと言えるかもしれません。私のような、いわゆる英語学系言語学者が多いのは日本の大学の特殊事情によるものですが、近年は国内外の最前線で活躍している優秀な研究者も増え、研究全体の質は“ratchet effect”もあって確実に上っています。英語が世界の学術用語であることは私たちにはたしかに不利な条件ですが、近年はインターネットを含む各種のコーパスが利用でき、条件ははるかに良くなっています。今の50代以下の世代には従来の「壁」を突破して「知の仲介者」ならぬ「知の創造者」となりうる人材も少なくないようです。独創的な理論を海外に広めるのは、理系ですらそうですが、欧米の強い抵抗が予想され、そう簡単ではないでしょうが、将来はぜひ実現してほしいものです。これに関連して、言語研究の深化と学際化にともない、言語という認知機構の謎の核心部分に迫るには、研究テーマによっては、従来のタコツボ型の研究スタイルに代わる、学際チームによる共同研究が今後は必要になるでしょう。理系では当たり前のことが欧米ですでに顕著な傾向になっていることは、アメリカ言語学会の機関誌 *Language* の編集主幹が2年ほど前に指摘している通りです。

最後に、北海学園大学も高等教育の大衆化、学力低下と少子化・18歳人口の減少といったわが国の大学が抱える問題を免れないことは確かですが、本学は幸い北海道では大学らしさを失わずにいられる諸条件を満たしており、今後とも組織やカリキュラムなどのさらなる改革を取り入れ、個性的で魅力的な大学をめざしてますます発展してほしいと願っております。

略 歴

栗原豪彦 1940 年（昭和 15 年）2 月 12 日生まれ

学 歴

- 1962 年（昭和 37 年）3 月 北海道大学文学部文学科卒業
1964 年（昭和 39 年）3 月 北海道大学大学院文学研究科修士課程修了
1967 年（昭和 42 年）3 月 北海道大学大学院博士課程単位取得満期退学
1972 年（昭和 47 年）9 月 ミシガン大学大学院 (Rackham School) 言語
学科入学
1973 年（昭和 48 年）8 月 同大学院中退

職 歴

- 1967 年（昭和 42 年）4 月 北海道大学文学部助手
1969 年（昭和 44 年）4 月 北海道大学文学部講師
1975 年（昭和 50 年）7 月 北海道大学文学部助教授
1982 年（昭和 57 年）4 月 北海道大学言語文化部助教授
1987 年（昭和 62 年）5 月 北海道大学言語文化部教授
1990 年（昭和 65 年）7 月～8 月 ポートランド州立大学客員教授
2000 年（平成 12 年）4 月 北海道大学大学院国際広報メディア研究科
（現国際広報メディア・観光学院）教授（言語
文化部教授兼任）
2003 年（平成 15 年）3 月 北海道大学言語文化部定年退官
2003 年（平成 15 年）4 月 北海学園大学人文学部・大学院教授

主な研究業績

1. 1965 年 「副詞辞の位置」『北海道英語英文学』第 10 号 日本英文学会北海道支部, 63-71 頁。
2. 1967 年 「副詞辞の位置」『現代英語教育』4 巻 4 号 東京：研究社, 16-17 頁。
3. 1968 年 「Anaphora の構造」『北海道英語英文学』13 号 日本英文学会北海道支部, 109-118 頁。
4. 1969 年 「動詞の代用形覚え書」『英語青年』第 115 巻第 3 号 東京：研究社, 151-152 頁。
5. 1974 年 「“Free Deletion” and Certain Related Problems」『北海道大学外国語・外国文学』20 号, 北海道大学文学部, 1-36 頁。
6. 1974 年 「On the Notion of Paraphrase in Linguistic Analysis」*The Northern Review* 第 2 号 北海道大学英語英文学研究会, 73-91 頁。
7. 1975 年 「句動詞の基底構造」『北海道大学外国語・外国文学研究』第 21 号 北海道大学文学部, 359-373 頁。
8. 1977 年 「「伝達動詞」の文法」『北海道大学外国語・学国文学研究』第 23 号 北海道大学文学部, 27-56 頁。
9. 1977 年 「いわゆる「間接談話」について」*The Northern Review* 第 6 号 北海道大学英語英文学研究会, 73-85 頁。
10. 1980 年 「伝達動詞と話法の型」『北海道大学外国語・学国文学研究』第 27 号 北海道大学文学部, 1-15 頁。
11. 1981 年 「換喩と提喩の意味論覚え書き」*The Northern Review* 第 10 号 北海道大学英語英文学研究会, 91-103 頁。
12. 1982 年 『新英語学辞典』（大塚高信・中島文雄監修）研究社,（代名詞（pronoun）, 固有名詞（proper noun）, 動詞副詞結合（verb-adverb combination）など 36 項目執筆）

13. 1984 年 「The Syntax and Semantics of Quotation Reconsidered」
『北海道大学言語文化部紀要』第 7 号, 67-90 頁。
14. 1985 年 「習熟度から見た北大生の英語学力(1)」(共著) *The Northern Review* 第 14 号 北海道大学英語英文学研究会, 35-52 頁。
15. 1987 年 「英語における Politeness の諸相」『北海道大学言語文化部紀要』第 10 号, 149-152 頁。
16. 1989 年 「北大教養生の英語習熟度—60~62 年度実態調査研究—」(共著)『北海道大学言語文化部紀要』第 14 号, 205-236 頁。
17. 1991 年 「日本語及び外国語の実験音声学的分析研究」(共著)『北海道大学言語文化部紀要』第 20 号, 241-288 頁。
18. 1993 年 「代名詞照応における Accessibility の概念」*The Northern Review* 第 21 号 北海道大学英語英文学研究会, 19-35 頁。
19. 1993 年 書評 Terence Parsons: *Events in the Semantics of English: A Study in Subatomic Semantics*. 『英文学研究』(日本英文学会) 第 70 卷(1), 121-126 頁。
20. 1994 年 「北大教養部生にみる英語習熟度と到達度」『北海道大学言語文化部紀要』第 26 号, 177-192 頁。
21. 1994 年 「暮らしのことば一言語運用の深層と表層」北海道大学公開講座『資源と生活』, 63-68 頁。
22. 1995 年 「日英語における敬語行動(ポライトネス)」『言語文化部研究叢書 ことば—その仕組みと働き—』北海道大学言語文化部, 35-45 頁。
23. 1996 年 「語用論と外国語教育」『言語文化部研究叢書 9 大学英語教育の現状と展望』北海道大学言語文化部, 39-52 頁。
24. 1996 年 翻訳 ロバート・デソウイツ『マラリア vs. 人間』(*The Malaria Capers*) 東京: 晶文社, 321 頁。
25. 1996 年 「授業方法の改善: コミュニケーション能力の強化」『英語教育』第 42 巻 6 号 東京: 大修館, 81 頁。

26. 1997 年 「第二言語習得と定型表現」 *The Northern Review* 第 25 号, 北海道大学英語英文学研究会, 1-12 頁。
27. 1998 年 「ことばと行為—コミュニケーションの深層と表層」『言語文化部研究叢書 26 ことばについて考える』, 131-150 頁。
28. 1998 年 「コミュニケーションのタテマエとホンネ」 北海道大学放送教育専門委員会編『ことばについて考える』, 145-154 頁。
29. 1999 年 「言語と音楽」『21 世紀の感性教育—スズキ・メソードの理論と背景』 神戸：六甲出版, 119-133 頁。
30. 2000 年 非母語話者による日本語母音/u/の音響特性」『北海道大学言語文化部紀要』第 38 号, 85-103 頁。
31. 2001 年 編著『日本語音声指導のための日本語及び諸言語の実験音声学的対照研究』文部省科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 平成 10 年度～平成 12 年度研究成果報告書, 333 頁。
32. 2002 年 「言語とコミュニケーション：意思伝達手段としての言語使用のルール」『北海道大学国際広報メディア研究科・言語文化部研究叢書 48 国際広報メディア学のパースペクティブ』, 168-183 頁。
33. 2003 年 「音楽脳とスズキ・メソード—言語と音楽機能の局在と転移効果をめぐって」『現代のエスプリ』特集号—才能教育の展開』東京：至文堂, 146-154 頁。
34. 2003 年 「『不規則な』代名詞照応と素性」『英語青年』(研究社出版) 7 月号, 227-228 頁。
35. 2003 年 「『心的實在』と証拠をめぐって」 *The Northern Review* 第 31 号 北海道大学英語英文学会, 1-11 頁。
36. 2003 年 「普遍的教育システムとしてのスズキ・メソード」『才能教育』第 145 号 才能教育研究会, 49-51 頁。
37. 2006 年 「言語学の対象をめぐる二分法再考」『北海学園大学人文論集』第 35 号, 1-39 頁。
38. 2008 年 論評「言語能力と一般認知能力との相互関係：生成文法の試

み」(奥聡)へのディスカサントとしての論評『北海道英語英文学』LIII, 日本英文学会北海道支部, 78-81 頁。

39. 2008 年 「ポライトネス理論をめぐる論争—『合理主義的(rational)アプローチ』と『言説的(discursive)アプローチ』」(1)『北海学園大学人文論集』第 41 号, 1-51 頁。
40. 2009 年 「ポライトネス理論をめぐる論争—『合理主義的(rational)アプローチ』と『言説的(discursive)アプローチ』(承前)」『北海学園大学人文論集』第 41 号, 1-42 頁。
41. 2009 年 「Bourdieu の言語論」『北海学園大学学園論集』第 140 号, 81-106 頁。
42. 2010 年 「言語学における合意と争点」本号掲載。